

オペラ初出演「蝶々夫人」のピンカートン

私が、最初に、オペラの主演を演じたのは、1982年4月22日、32歳の時の「蝶々夫人」のピンカートン役である。そのいきさつは、以下の通りである。

鹿児島大学医学部2年生の頃から、声楽を習い始めた私は、医学部5年生の時と、医師になってからの31歳の時の2回、南日本音楽コンクールを受けた。2回とも予選は通過できたが、入賞・入選には至らなかった。(その悔しさから、その後、全国レベルのプロ歌手も対象としたコンクールに挑戦し、「日本クラシック音楽コンクール」にて、声楽部門第1位、全ての分野でのグランプリ獲得、「太陽コンコルソ・カンツォーネ・イタリアーナ」にて優勝、という成績を獲得することが出来た。)

ところが、2回目に受けた31歳の時の南日本音楽コンクールの成績発表の翌日に、審査員のお一人であるソプラノ歌手の池端ミチ子先生から、大学病院にお電話を頂き、ご自分が「鹿児島県芸術文化奨励賞」を受賞したので(私も、平成10年度に、「鹿児島県芸術文化奨励賞」を受賞した)、その記念として、オペラ「蝶々夫人」の全幕公演を行いたく、ついては、私に、ピンカートン役をお願いしたいとのことであった。私は、即座に、「私は、南日本音楽コンクールで、入賞はおろか入選もしていないのですが・・・」と申し上げたところ、「米澤さんのお声は素晴らしいので、ぜひ、ピンカートン役をお願いしたい」と強調され、なんだかスッキリしないまま、結局、お引き受けすることになり、その年の12月の「試演ハイライト演奏会」を経て、翌年の1982年4月に、鹿児島県文化センター(現在の「宝山ホール」)にて、オーケストラ演奏と共に、完璧な舞台装置を設置した「蝶々夫人」の全幕公演が行われ、大成功をおさめることが出来た(写真)。





まさに、私のオペラ全幕出演の「初舞台」であったが、幸い、「蝶々夫人」では、第2幕では、ピンカートンは日本にはおらず、第3幕でも、前半に少しだけの出番があるのみなので、私が本業の医学の仕事で忙しい時には、第2幕か第3幕の後半の練習をして頂き、私に時間がある時に、第1幕と第3幕前半の練習をして頂くということで、なんとか乗り切れた。

(2021年12月18日記)